

---

# 心に刻まれた記憶

大輔華子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心に刻まれた記憶

### 【Nコード】

N1139L

### 【作者名】

大輔華子

### 【あらすじ】

『記憶障害』という人生のハンデを負った華織は、思いもしない事件に巻き込まれかける。そこで彼女が味わうこととは。

(前書き)

推理は全く必要としません。必要とするのは、ただ、あなたの感性だけ。結末は。

<—>

東京都世田谷区内に位置する私鉄のS駅を下車し、南に五分ほど歩くと、大きな木の茂る広い庭と洒落たタイル貼りの三階建ての『豪邸』が見えてくる。

正門の二本の石柱の上部は、銅に彫刻の施された立派なアーチで飾られており、石柱の右側には、『Sインフォテック株式会社日本支所』、左側には金縁の表札があり、『K・SATO』の名前が刻まれている。

建物の大きさや窓の様子から推して、おそらく部屋数は十五室を下らないだろう。

建物の脇のほうにはシャッターのある建屋があり、入り口は閉じられているが、その幅からして車二台分のスペースのようだ。

今年十五歳を迎えたばかりの華織は、病院の看護士に付き添われ門をくぐった。

石畳を十数メートル進んだところにロッカーのついた玄関があるが、呼び出しは脇にあるカメラ付のインターホンだ。

ピンポン・・・。

『はい。』と若い女性の声。

玄関ドアは真ん中から切れ、両側へ開いた。

間口十メートル、奥行二〇メートルほどのエントランスには、入り口から両側に各五名づつ、男女入り混じって制服姿のお手伝いさん達が並んでいる。

華織には、病院で意識を取り戻す前の記憶は全くなかった。

自分の名前、年齢もわからない。  
記憶喪失とみられるその症状は、それこそ徹底したもので、自分が気が付いたときの彼女は、何と自らの性別すらわからなかったほどである。  
言葉の記憶にはまったく問題ないので、話してみてもあらためて自分が女だと気が付いたという。

母弘子の話によれば、華織は約三ヶ月前、下校中に交通事故に遭い、頭を強打し一時重体となったが、以前の記憶を失ったこと以外は身体的に大きな支障も残さず助かったという。

今春、華織は高校に入学した。

彼女の入学した学校は、世田谷区内に広い敷地を有し、幼稚園・小学校・中学校・高等学校から短大・四年制大学まで一貫経営の学校法人で、地域柄、富裕層のご子息が生徒のほとんど大部分を占める。彼女は、最初のうちは学校の勉強についてわからないことが多く、他の生徒についていくのが精一杯であったが、特に親しい友達はいない、また、作ろうともしない彼女は、一生懸命勉学に励み、一年も経つ頃には学年でも十番以内を常にキープするまでになっていた。

彼女にとって『親しい友達がない』ことは、高校に入学した当初から疑問であった。

一貫校でありながら、彼女のことを知る者は誰一人いない。彼女自身は記憶を失っていたから、他の人を思い出すことはないが、もし自分が中学から、またその前からこの学校に居たなら、先生でも生徒でも誰か自分のことを知る人がいる筈である。

もちろん高校からこの学校へ入学する者も全体の二割ほどいるから、当初彼女は自分もそうかと思いい、他の生徒の話を読んでみたが、高校から入学する生徒は、例外なく筆記試験と面接を受けて受験に合

格した者であった。

彼女には受験の記憶はない。だいいち、その時期は母の話では入院中であり、受験できる筈がない。

彼女の疑問に対して、母弘子の答えはいつも明確ではなかった。

<二>

華織は、何不自由なく生活をし、学校へ通い、無事高校を卒業した。

大学は、そのまま短大へ進み、これを卒業してから、彼女は公認会計士資格の取得に向けて勉強を始めた。

短大卒業後の彼女は、いわゆる完全な『ひきこもり』生活に入っていて、四六時中参考書を読みあさり、三年後には、遂に公認会計士試験の論文式試験（旧二次試験）に合格した。

彼女が何故、資格取得に向けてひたすら努力を傾けたかということについては、一つの理由があった。

彼女は、中学校の卒業間際に交通事故に遭い、それ以前の記憶を失っていたが、それ以降の彼女の頭の記憶領域に重大な後遺症を残したことのほうが、本人にとってはるかに問題であり、正常な社会生活を送るために大きな障害となっていた。

彼女は、時折日常的に記憶を失う。

昨日のことを全く覚えていない、ということがしばしばあった。

ひどいときは、外出から帰宅して、今自分がどこから戻ってきたかもわからないことがあった。

自分は、他人と一緒にあって、まともに社会生活を送ることができない。

社会に出れば天涯孤独、人生の一人ぼっちを覚悟した華織は、他人とかかわりあうことを避け、ひたすら勉強をして資格を取ることに

した。

ただ、目的もなく。

そのこと以外、彼女にできることがなかったのだ。

難関とされる公認会計士試験をパスし、資格は目の前にあったが、資格を取得するためには、一定の実務経験が必要であり、大手企業の財務部門や監査法人に就職しなければならない。

彼女は入社筆記試験では常に優秀な成績をおさめたが、突然記憶を失ってしまうという頭の障害は、すべてにおいて彼女の社会生活への自信を喪失させていて、これが面接では決定的なマイナスとなっていた。

こうして彼女は、ことごとく面接試験に落ち、公認会計士資格取得の道は閉ざされた。

彼女は他人とほとんど付き合うことなく、家で両親と暮らしているうちに月日は流れ、三〇歳になった。

両親は、彼女の将来を案じて不安をつのらせていたが、本人の意思を尊重し彼女の一人暮らしを容認することにした。

彼女は、自宅の電車の最寄駅から三つ隣の駅近くに部屋を借り、一人暮らしを始めた。彼女は他人とのコミュニケーションを必要とする職種や、金や商品を扱うことには自信がなかったため、週に2回、近くの遊園地の隅にある水族館の客寄せで、イソギンチャクの縫いぐるみを着て収入を得ていた。

半年ほどすると、彼女の勤労さが認められ、遊園地の女性主任さんは彼女に気を遣い、人気のウーパールーパーの縫いぐるみに昇格させてくれたが、彼女にとっては、この縫いぐるみの頭が重くて、おまけに肩から下が全身ピンク色のタイト姿のそれは逆に苦痛であっ

た。

「あの、主任。この上に、タイツと同じ色のスカートとか履かせてもらえないでしょうか。」

「びつたりすぎて下着のラインがどうも気になるんです。」

「スカート履いてる魚はいないよ。下着のライン？あんだ。そんなに気になるなら下着はやめたらいいじゃない？あんだ年いくつよ。」  
と女性のメガネの主任さん。

(ムッ！)

「スカート履いてる魚も変ですけど、足の生えてるイソギンチャクの方がもつと変だと思えますけど。」

主任さんは、メガネをはずして彼女の方を向いた。

「あのね。そういうことじゃないの。イソギンチャクやヒトデはどうでもいい存在なのね。」

ウーパールーパーは当水族館の花形なのよ。

私があんたくらいの年頃には、ワカメの着ぐるみだったのよ。」

(ワカメの着ぐるみ、って一体どんな姿なの？)

主任さんは口に泡を溜めながら、さらに続けた。

「入口で子供のお父さんがセクシーなウーパールの縫いぐるみを見る。そしてお父さんは、どうしても水族館に入りたくなる。」

そもそも、あんだね。自分の立場わかってるの？

ウーパールーパーになれたということがどういうことなのか。

あなたはこのことに誇りと自信をしっかりと持ちなさい。」

その女性主任は、ウーパールーパーに若い頃なりたかったが、当時どうしても許してくれないそのまた上の女性主任がいて争っていたらしい、という話は聞いたことがある。

ウーパールーパーは、水族館の縫いぐるみを着る女性の一つのトップステイタスなのだ。

(訳がわからない。一体何のこと言ってるの？何の誇りよ。ウーパ

「何とかとか知らないけど、本来私は、公認会計士になっていたのよ。こんなところで、裸踊りみたいなことをしている筈じゃなかったのよ！」

三〇歳を過ぎた彼女としては情けない限りだった。

遊園地での収入は月に四万円足らずで、賃料にもならないので、実質的な生活費は、家から月二〇万の仕送りを得てこれによってまかなわれていた。

<三>

彼女にある一つの転機が訪れたのは、一人暮らしを始めてから約一年経った頃だった。

彼女の住む賃貸マンションでは、エントランスの開閉をマンションの住戸の鍵か、各住戸内のインターホンの操作で行うようになっており、マンションの住人の出入り時以外に住人以外の者が勝手に出入りすることはできない。

ある日の夜、十時を回った頃、華織が入浴を終え、そろそろ寝支度をしていると、突然チャイムが鳴った。

チャイムを鳴らしたのは、エントランスの外側からだった。

「はい。」

「た、助けてくれ！！追われている。ここを開けてくれ！！早く。」と男の声。

彼女はあまりに差し迫った声に、気が付くとエントランスを開けてしまっていた。

次の瞬間、一階エントランスに最も近い彼女の部屋の玄関のチャイムが鳴った。

「開けてくれ。早く。殺される。」

開けてはいけない、と思う前に『殺される』という言葉に反応して、思わず彼女は玄関を開けて男を中へ入れていた。

男は四〇歳を少しまわったくらいの年恰好だった。背広にネクタイ姿。意外にきちつとした印象だった。

「少しの間、かくまってくれないか。」

もう夜十時を回っている。少しの間、も何もないだろう。

彼女は冷静になって言った。

「警察に来てもらいましょう。」

「ちよい待ち。今の時点で警察を絡めるのはまずいのだ。」

女性一人の部屋に、夜遅く、男が侵入してきている。

これは、普通の状況ではない。

「いいえ。警察に来てもらいます。」と彼女。

「待て。待て！事情を説明する。」

「――〇番警察です。何かありましたか。」

男は、慌てて電話口に向け寄り切ろうとしたので、少し電話口でもみ合いになった。

「ばか！切るんだ！」「きーっ！」

警察はすぐさま異常を察知して、

「君！電話をそのままにして！！」「」

男は突然彼女の足元に崩れ、大声で子供のように泣き出した。

彼女は啞然として、とりあえず受話を切り、かがみこんで男の顔をうかがった。

男は完全に『ウソ泣き』だった。

「うえーん。」

「やめなさい！！」

男は目元を手で隠しながら『ウソ泣き』を繰り返した。

「びえーん。」

「もうとつくにばれてるから。やめなさい！！」

その後、男は三〇分ほど家の中をうろろしていたが、一枚の名刺を彼女に渡し、部屋を出て行った。

<四>

翌朝、彼女は男の名刺を頼りに、職場である事務所を訪ねた。

人との接触を拒み続けた彼女が腰をあげた最大の理由は、男が渡した名刺に『大木公認会計士事務所』と記されてあったからである。  
(ウーパールーパーの裸踊りはもうごめんだ。)

およそ会計士事務所に似つかわしくない、繁華街のど真ん中、雑居ビル一階の焼き鳥屋と立ち飲み鰻屋の間に事務所はあった。

もともと店舗を改装せずに事務所に使用しているので、入り口は飲み屋の開き戸である。

さすがにのれんはないが、看板はサッポロビールの広告灯具に『大木公認会計士事務所 ココ』と書いてある。

しかも『ココ』は赤のマジックで、手書きである。

華織は、『ココ』を訪れたことに少し後悔したが、かれこれ電車を乗り継いで小一時間かけてきたので、とりあえず『事務所』へは入ってみることにした。

中は右側がカウンター、左側は小上がりの座敷テーブルが三つ、奥にレジスターが置いてある。

まったくの『飲み屋』の雰囲気である。

「ごめんください。」

「……………」

「ごめんください!」

「へーい。ちょっと待ってくださいね。」

あの男の声だ。

奥の方からあのとときの男が顔を見せた。

「あれあれ。あのときのお姉さん。やっぱり来なすったね。」

「何でそうとわかったの？」

「あんた、部屋の中に資格の本ばかりあったし、会計士試験の合格証書も無造作に置いてあった。」

俺は真正正銘の公認会計士だ。調理師の免許も持ってるし。ひよんなことからベビースITTERの資格もある。

あいにく、うちの事務所には事務員がいなくてね。捜してたところだ。」

「こんなところに依頼に来る人とかいるの？」

「いない。」

彼ははつきり言い切った。

「自慢じゃないが、店を開いて五年になるが、のれんをくぐったのはあんたが二人目だ。」

「それじゃ事務員必要ないんじゃない？」

それから、店を開いて、とか、のれんをくぐる、とかやめなさいよ。その言い方。」

彼は彼女の話を見殺して話を続けた。

「実はね。あんたの前に一人、金になりそうな依頼者が来たんだよね。成功報酬五百万円の依頼だ。」

本日、あんたを採用する。今日から働いてよね。報酬一ヶ月五万円。いや十万円でもいいよ。成功したら。」

彼女の心は少し躍った。それは金額の問題ではない。

（あこがれの会計事務所への就職だ！でもこの人何かおかしい。成功して五百万円。私には月十万円？はああ。さては足元見てるな。）

「あのお。私、月二〇万くらいないと、今の職場と見合わないんですが。」

見栄を張ってみた。

「今の職場？何してるんだ。」

彼女は答えに困り、顔を赤くした。

「ショービジネスよ。」

「ショービジネス？あんまり世間に顔がわれてるとまずいな。」

「顔は誰にも見せてないわ。」

「覆面レスラー？いや、遊園地の着ぐるみだな。よし、月十二万にしよう。」

この男、恐ろしく勘がいい。

それから、雇用主である彼にはどうしても伝えておかなければならないことがある。

彼女は頭に障害があつて、時折記憶を失うことだ。

そのことを話すと、彼は笑い飛ばした。

「いいねえ。そういうのがいいんだ。誰かに訊かれても、『知りません、記憶にありません』。これは一種の武器だね。欲しいね。そういうの。」

彼女は嬉しさに涙が出そうだったのをぐっところえる。

（私はついに人並みの『社会生活』を得られるかもしれない。）  
彼の名前は『大木かなる』といった。

それは頭に障害を持った彼女が意識した、彼女にとっては人生初めての『友達』だったかもしれない。

<五>

大木は、彼女に詳しく依頼人の内容を説明した。

依頼主は東京W銀行の橋爪管財部長。

依頼内容は、その銀行の副頭取の不祥事に関するものだ。

次期頭取と目されている副頭取、『錦織時蔵』の横領疑惑である。

東京W銀行では、大手のS T A公認会計士事務所が独立監査法人として会計監査・内部統制監査に当たっている。

そして、今年度も例年のごとく、問題なく監査報告が行われる予定であったが、三ヶ月ほど前に銀行内での無記名の怪文書によって、

錦織時蔵副頭取の横領が告発され、また、監査法人にもこの怪文書が渡って、大騒ぎになっている、とのことだ。

依頼に来た橋爪管財部長は、職務上本件にかかわるものではないが、錦織副頭取の忠実な部下であり、監査法人が怪文書にかかわる何らかの別な情報入手しているのかどうか、ともかく状況を調査して事実関係を明らかにしてくれ、とのことである。

依頼を受けた大木が、さらに詳しく聞いたところによると、橋爪管財部長いわく、錦織副頭取の横領は全くの事実無根であり、告発文書自体、事情のわからない者が書いているような稚拙な内容であり、つじつまの合わない点が多い、とのことである。

彼に何らかの恨みを持つ者か、次期頭取への昇格を妨害する意図で行われたか、のいずれかに違いない、ということだ。

橋爪管財部長の言葉を一方的に鵜呑みにするわけにはいかないが、依頼人が言うには、ともかく、これ以上妙な文書や書類が出てきては困るので、まずは、S T A公認会計士事務所と同業者として第三者的に探りをいれて欲しいとの話だ。

大木は、『何も不正が行われていないこと』を証明することは、不正が行われていることを証明するよりもずっと困難であり、経費倒れになりかねないので、一度は依頼を断ったが、依頼人としても、外部に依頼しない限り真相へのアプローチはできないので、告発者を特定し、それを証明するだけで五百万円の報酬を出す、と大きく歩み寄ってきた。

このため、大木はこれを受けて立ったのだ。

大木は、昨日、S T A公認会計士事務所の東京W銀行担当の業務執行社員と連絡を取り、都内某所の喫茶店で待ち合わせをしていた

が、待てども待てども相手が現れず、逆に喫茶店への伝言で、S T A公認会計士事務所社員を名乗る別な男から場所を変えての呼び出しをくらった、とのことだ。

大木が指定時間に指定された場所へ行ってみると、そこには明らかに暴力団員とみられる多数人が待ち伏せをしており、身の危険を感じた彼は、近くにあった華織の住むマンションに逃げ込んだ、ということであつた。

華織はその話を聞いて、依頼はなかつたことにして断ろう、と進言したが、怪文書の存在はもとより、その内容まで知ってしまった限り、いまさら依頼はなかつたことになどできないし、そんなことを言おうものなら、両方を敵にまわしてしまふことになり、もっと危ない、と大木は言い切つた。

華織は怖くなつてきたので、大木に懇願した。

「じゃあ、私はかかわっていないことにしてもらえませんか？」

「ずるいな。ずるい。君は。もう知ってしまった以上、君も俺も同じだ。ははは。駄目え！」

彼女は何か割り切れない気持ちをもった。

（これって公認会計士全く関係ない仕事だ。探偵だよ、これは。しかも命がけだ。）

<六>

怪文書が銀行内のどの人間に配布されているのか、まずそのあたりのことすらわからない。

わかっていることは、S T A公認会計士事務所の当行担当の業務執行社員宛てに送付されたことくらいだ。

これは、大木がその人間に内容をほのめかしたところ、現に内容を知っていたことから確かである。

S T A公認会計士事務所の社員は、その独立性立場から、確証が得

られるまでは事前の情報を監査先である当行の役員や社員に漏らすことは普通考えられない。

また、告発文書が告発された本人、すなわち錦織副頭取の目に留まるところへ配布される筈もない。

では、何故、橋爪管財部長が怪文書の内容まで知っていたのか。

彼の言う、『監査法人にもこの怪文書が渡って、大騒ぎになっている』とはいったい誰の情報なのか。

華織は、まず、依頼人である橋爪管財部長に自分の耳で話を聞いてみる必要があると考えた。

そうでないと、横領の事実以前に、怪文書を取り巻く基本的状況が把握できないからだ。

橋爪管財部長は、華織の面会の求めに対しすぐに応じてくれた。

図書館で待ち合わせをして、ビジネスホテルの一室を昼間借りてそこで話をした。

彼が最初に情報を得たのは、当行の総務部長からであったという。

当行の沖本頭取は、行内の定期行内便で頭取本人宛て送られてきた怪文書を秘書経由で受け取り、総務部長と内部監査室長を社長室へ呼んでこれを見せたという。

定期行内便の発信元は、大阪心齋橋支店となっているが、支店の発信記録がなく、実際に発信されていないので、この点は発信先偽装であつてさっぱり分からないという。

総務部長は、事態を深刻に受け止め、内部監査室長へは行内での内偵の協力依頼をし、管財部長である橋爪に対しては、怪文書にアルファベットで書かれている社外の融資先企業の特定を急ぐように依頼した。

しかし、橋爪管財部長は、無記名の怪文書を根拠に社外の企業に妙な動きをすること自体、当行にとってリスクが大きすぎると判断し、何も動いていないという。

彼の言っていることは、いかにも合理的であり、華織はひとまずこれを信用することにした。

ただ、二番目の疑問、『監査法人にもこの怪文書が渡って、大騒ぎになっている』とはいったい誰の情報なのか、という点については、これでは全く説明がついていない。

このことに対して、華織がつつこむと、橋爪管財部長はただむにやむにやと『多分そうだろうと。』とか『頭取がいつていたかなあ。』とか、かなりいい加減な受け応えである。

華織はこれ以上彼に話を聞いても本当のことは言わないと考え、彼の話が本当かどうかの『裏』をそれぞれ、沖本頭取・総務部長・内部監査室長から取ってみた。

確かに、総務部長が橋爪管財部長を呼んで、彼の言うとおり、外部調査を依頼したことは確かであったが、二番目の疑問に対する重要な事実認識の『ツレ』が明確に認められた。

沖本頭取以下、総務部長、内部監査室長共に、同じ怪文書が監査法人に渡っているという認識が全くなかったことである。

華織は、夕刻その日の調査を終了し、事務所へと向かった。

彼女が事務所の前まで戻ると、入り口には昨日訪問したときにはなかった『のれん』が架かっていて、彼女は一瞬場所を間違えたかと思った。

『大木公認会計士事務所 ココ』と書いてあったサッポロビールの看板も見当たらず、昨日とは何か様子が違う。

華織は、びくびくしながらのれんを割り、開き戸をあけた。

「へい。らっしやああい。」

大木が手ぬぐいを額に巻いて、カウンターの中にいる。

「大木さん。何やってるんですかあ？」

「誰？オオキって。待ち合わせかい？」

大木はちらつと小上がりの座敷テーブルに座っている二人の男性客に一べつをくれ、華織にウインクで目配せを送った。

二人の男は互いにレポートを見ているが、レポートの下のマークは紛れもなく『STA公認会計士事務所』の商標だ。

この店が入っているビルは、今問題としている、東京W銀行の本店のすぐ裏手にある。

その場所で、年配の公認会計士がレポートを見ているということは、何か不自然で、例の事件に関係があるかもしれない。

華織は、正面を向いた一人の男と目が合ったので、すかさずニコッと微笑んで、

「いらつしゃいませ。お飲み物のお替りはいかがですか？」と店子を装った。

すると男は、

「飲み物はいいんだけど、食べるものは豆腐とじゃがいも以外、何があるの？こう、何ていうか。焼魚とか。」

（客の会計士は始めてこのあたりへ来た人で、当行の担当じゃない。何か異様な雰囲気だ。）

「焼き鳥と鰻ならありますけど。」と華織。

大木はびつくりして、目で『ない。ない。』と言ってきた。

男は、「焼き鳥とウナギ？？じゃ、それでいいや。二人前づつ頂戴。」と言った。

華織は、両隣の店に行つて、しばらくしてから、焼き鳥と鰻の蒲焼を持って店に戻ってきた。

彼女は、それを座敷テーブルに置きながら、目を皿のようにしてレポートの中身を覗きこんだ。

一瞬、『東京W銀行』という字と『錦織』の字が見えた。

( やっぱり。これは上司への報告レポートだ。 )

男は、眉間にしわを寄せて、レポートを引き寄せながら、

「おい。なっ、何見てるんだよ。」

華織は、「はあ？」と言いながら、わざと男の股間にビール瓶を倒した。

「ぎゃっ。おい。こらー！」

「あれまあ。ごめんなさい。うつかりしちゃって。ごめんなさい。」

「はっ早くそこのおしぼりをくれ。」

華織はテーブルに置いてあったおしぼりを思い切り男の股間に押し付けた。

そして、あらぬ限りの力を込めて男の股間を叩く。

ボン！ ボン！ ボン！ ボン！

「ぎゃーっ！ いてえ。何するこの女おまー！」

ボン！ ボン！ ボン！ ボン！

「ぎゃああああ。待て待て！！自分でやる！自分でやるからあ！  
わかった、わかったからあ！」

バシーン！！ バシーン！！ バシーン！！ バシーーーーーーン  
！！

男は最後の一撃を正確に中心に食らって、あまりの痛さで目もうつろに、顎を上げてしまっていた。

もうレポートどころではない。

レポートのページはばらけて、畳に無造作に転がっている。

華織はしめたとばかり、もう一本のビールをレポートの上に倒した。  
今度は向かい側に座っていたもう一人の男が、

「おいこらあ。馬鹿！ ああーあ。」

華織は、「あれまあ。ごめんなさい。お客さまの大切な紙が。ああ私、どうしましょ。すぐに拭いて参ります。」

股間を叩かれた男は、真っ赤な顔をしてアブラ汗をかき、ひたすらに俯いている。

しばらく動けそうにない。

向かいの男は、『大丈夫か?』というように相手の肩に手を置いて  
いる。

華織はビールで濡れたレポートをかき集めて、店を出て向かいのコ  
ンビニに走り込んだ。

コピー機は誰も使っていなかった。

彼女は、レポートの水気を持っていたタオルで拭きとり、急いで十  
ページほどのレポートのコピーを取った。

<七>

思わぬ偶然か、大木公認会計士事務所が飲み屋を兼ねていたこと  
から、S T A公認会計士事務所の内部レポートが手の中に転がり込  
んでくることとなった。

S T A公認会計士事務所の業務執行社員のお偉いさんは、その日す  
っかり勢いを失って、鰻の蒲焼の折り詰めを手に店を出て行った。

一人は完璧にビッコをひきながら。

華織は平謝りに頭を一杯下げていたが、被害にあった男は、

「いや。いいんだ。こんなこともある。人生は。今まで順調過ぎた  
んだ。」と言った。

(素直じゃない。いいわね。頭の切れる人は、こういう風に謙虚で  
なければいけないのよ。)

レポートの報告者は、同会計士事務所の『佐藤恵子』という公認会  
計士だった。

その会計士は、大木や華織の知る限り、担当担当の会計士ではない。  
おそらく、本件の特別調査担当としてその任に当たっている者であ  
ろう。

その内容では、怪文書が大阪、船場発の宅急便で直接公認会計士事  
務所御中として送付された、と表記されている。

確かに、大阪心齋橋支店と場所が近く、告発者はいずれにしてもその周辺から発信しているようである。

レポートの中味として、何度も登場しているのが、当行の『H氏』である。

華織は、これを見てピンときた。

『H氏』は橋爪管財部長以外に上層部で該当するものがない。

その彼は、当然告発者たり得ないし、当レポートの報告者である公認会計士佐藤恵子との直接の面識こそないが、行内の情報を彼女へメールで流したり、逆に彼女の指示に基づき調査を社内で行って、その結果を逐一報告しているということだ。

彼の大木への依頼は、告発内容について事実関係を明らかにして欲しい、ということであったが、そう言う本人が行内の情報を当行の監査法人である、S T A公認会計士事務所の会計士へ流し、調査に協力しているということはどういうことか。

さらに、S T A公認会計士事務所のかんんでいる情報を調査入手して欲しいとも言っていた。

そもそも自分が直接コンタクトをとっておきながら、その情報を調査して欲しいとは、いかにもつじつまが合わない。何か、自作自演のような『狂言』の二オイがする。

その答えに近いものが、このレポートには記述されていた。

『H氏』つまり、橋爪管財部長は、怪文書のコピーを総務部長から入手後、告発された本人、すなわち錦織副頭取に見せてその指示を仰いだという。

橋爪管財部長は、元々錦織副頭取の忠実な部下である。いや、過去においてそうであった。

しかし、実際は、彼が思っているほど錦織副頭取の彼に対する思い入れはない、とレポートは断言している。

橋爪管財部長はそのことを次第に感じるようになり、彼は副頭取と

頭取の座を競い合っている青木専務に取り入るようになったという。時を同じくして、大阪方面からの錦織副頭取に関する不祥事疑惑が持ち上がった。

彼が、意を決して、怪文書の送付先であるS T A公認会計士事務所の求めに応じて動いた意味が、何となく華織の理解の中に入ってきた。

錦織副頭取は、怪文書のコピーを見てから、S T A公認会計士事務所に赴き、同事務所のトップに近い人間と交渉をし、自身で、もみ消しと事件の收拾を図ろうとしている。

その段階で、橋爪管財部長は逆に動く。

S T A公認会計士事務所は、当行創設以来の付き合いであり、このままでは本件が、財務報告に与える影響としては重要事項に当たらないと判断され、もみ消されてしまいかもしれない。

そこで、情報をもみ消されないための担保として、別な公認会計士事務所に情報を流し、当行と単独で手を握ることができないようにしている、ということだ。

これは、S T A公認会計士事務所にとってもリスクであり、同事務所のトップに近い人間は、別なルートを使って、すなわち暴力団を使って、うるさい『ハエ』つまり大木公認会計士を追い払おうとしたのだ。

華織は、このあたりまでの報告内容に触れて、公認会計士佐藤恵子の冷静な性格とその情報収集能力に舌を巻いた。

（佐藤恵子という公認会計士。当行の監査担当でないにも関わらず、内部事情をよく調査し、橋爪管財部長を操り、なおかつ自身の所属する会計士事務所の上層部の動きも掌握している。）

では、公認会計士佐藤恵子がレポートで何を訴えようとしているの

か。

それは、レポートの最後のページに明らかになっていた。

彼女が調査した限りでは、錦織副頭取は完全に『クロ』である。

その証拠は、彼女が大阪の告発者をすでに特定していて、その者と直接コンタクトを取り証拠の入手も含め準備は完了しているという。

彼女は、レポートで、当行自体が対外的に大きなダメージを食らうことは決して望んでいない。

当行が刑事事件に巻き込まれ、世間を混乱させ、罪のない債権者や預金者、貸付業者へ影響の及ぶことを危惧し、むしろこれを避けようとしている。

しかし、断固として、金品を横領した人間は、社内で失脚させるべきだと主張している。

動機に大きなツレはあるものの、結論的には、橋爪管財部長と同じ主張だ。

錦織副頭取が社内で失脚さえすれば、S T A公認会計士事務所のおツプに近い人間も穏便に対応するはずだという。

互いの利益や損害を考えても、そうすることしかできないと断言している。

こうして、レポートは閉じられている。

これはレポートというより、ある意味、当行トップ人事絡みの脅迫だ。

しかも今度は、社内の告発者でなく、一人の公認会計士が証拠を入手して、当行へ猛烈に牙をむいている。

ただごとではない。

そしてさらに、牙はS T A公認会計士事務所へも向けられていて、こちらも公認会計士佐藤恵子という厄介な爆弾を背負ったようなものである。

<八>

大木も華織も、佐藤恵子のレポートを見て、成功報酬をこの段階で諦めた。

もともと依頼は形だけのもので、正解のないようなものであったのだ。

ただただ、情報をかき回して、S T A公認会計士事務所が独立的に事実をうやむやにしないために、利用されていただけだったのだ。もちろん、告発者の特定についても、すでに佐藤恵子は当人を把握接触しており、もはや大木会計士事務所の出番は失われている。

華織は、ひよつとして自分の給料がもらえないのではないかと危惧した。

そこで彼女は、少しごねてみることにした。

「ねえ。大木さん。告発者を特定できたら、依頼者は五百万円払ってくれるって言うていたじゃない。これは状況がどうであろうと依頼者の約束でしょ。」

私、会計士の佐藤恵子さんに会って、『告発者は誰だか教えてくれないー？』って訊いてみようかしら。

案外、女同士で『あんたは、ほんとにお馬鹿さんねえ。どこの誰だれさんよ。わかった？おーほっほほ。』とか軽く教えてくれるかもよ。」

大木は、「そうだなあ。それもあるかもな。ってあるわけないだろ！！」

「だいいち、俺だつて公認会計士の端くれだ。口が裂けたつてそんなことおまえに言わせられるか！！」

（『端くれ』だつて。自分で言っちゃった。残念だけど私たちがスタート時点で、すでに彼女にずつつと離されてるのよね。もお。）

二人して肩を落としている最中、一通の書簡が大木宛てに届けられた。

その書簡には、郵便局で何回も『宛先不明』として戻されたような痕跡が残っていた。

まさか、飲み屋が会計士事務所とは誰も予想しないであろうから。

書簡は、差出人が公認会計士佐藤恵子となっていた。

そして、その内容は大木をしびれさせるに十分な文面だった。

たったの、二行。

『公認会計士大木かなる殿。

これ以上、本件にかかわると、そちらも決して為になることにはならない。心しておくように。

佐藤恵子。』

「ひい。怖え。この佐藤恵子って女。でも何か興味あるなあ。接触してみたいなあ。」と大木。

「ちよつと！へたに動かないでよ。本当に。巻き添えはごめんよ。」と口をとがらせる華織。

二人は、同時に「ふうーっ」とため息をついた。

華織は、大木にそう言うておきながら、今度は本物の探偵社を訪れた。

公認会計士佐藤恵子とはどんな人物なのか。

自分で動くのは怖いが、何となく佐藤恵子の境遇を知りたくなってきたのだ。

探偵社の約束ごとは、当然のことながら、依頼者の徹底した機密保持に努められていて、また、調査によって知り得た事実も依頼者以外、何人にも漏洩しない、というものであった。

依頼事項は、あくまで佐藤恵子の境遇に関する調査であつて、今回の事件は一切依頼事項に絡めてはいないし話もしていない。

しかし、調査の進め方によっては、今回の事実も芋づる式に出てき

てしまうかもしれない。

まあ、そのときはそのときだ、と華織は割り切って考えた。

<九>

数週間後、華織のマンションへ、依頼した探偵社からレポート完成の報告があった。

彼女は、わくわくしながら、その探偵社を訪れた。

探偵社では、レポートを担当した調査員と、もう一人、白髪の男が華織に應對した。

白髪の男は、老眼鏡を下にずらし、やや上目使いに切り出した。

「調査書につきましてですが、調査依頼のございました当人の他にも、関連する者の情報に関わる内容が含まれています。

これらの内容は、すべて個人情報として法律に定められた保護すべき対象に当たりますので、私どもは当然のこと、依頼者のあなたにも守秘義務がございます。この点充分ご注意ください。

また、私どもとあなたの契約関係によって、報告書の全部または一部の転載は、いかなる理由においても契約違反となりますので。

あと、もう一つ。特約として、調査内容の出所、つまり当探偵社を特定できるような内容の開示は禁じますので、この点もよろしく。」「  
やたら前段が長い。」

さらに続く。

「つい、先日も依頼者に内容をご説明申し上げておりましたところ、その方が急に怒り出しましてね。参りました。

『でたらめを言うな！』ってね。でたらめかそうでないかは、依頼者の方のご判断ですので、私どもはその判断にまでは関与しません。調査した範囲での、事実関係を忠実にご報告するだけですから。

調査代金は、調査報告書の納品と引き換えに戴くことになっており

ますので、内容云々で払う・払わないは無いですよ。いいですね。もしそんなことになったら、契約違反で提訴しますのでね。」

「わかっています。」

（早く説明始めろよ！）

若い調査員は、おもむろに調査報告書の写しを開きながら、華織にもデスクの上に正本の最初のページを開いて、見えるようにして置いた。

「順に内容をお読みしていきますので、ご質問は最後にまとめてお願い致します。」

調査レポートの内容は、以下の通りであった。

『佐藤恵子。本名：佐藤恵子。（旧姓：大内恵子）

生年月日：一九七五年八月二日（届出：一九七五年八月八日 乳児院長）

調査日現在 三一歳、独身。生計を共にする者 無し。

現住所：東京都世田谷区下北沢・・・』

（私と同一年だ。）

最寄駅は沿線の隣の駅だ。意外と近くに住んでいたんだ。）

『父親：登記なし

母親：大内香奈 一九五二年十一月三日生まれ

二〇〇四年十月三〇日死亡

両親に関する調査判明事項：父親は登記なく、認知者も調査日現在なし。

但し、事情聴取及び独自調査により非認知の父親は下記の者にほぼ特定できる。

錦織時蔵 一九四七年五月十三日生まれ

調査日現在 五九歳、東京W銀行取締役副頭取。 . . . . . 』

(ええ?? 父親があゝの錦織副頭取!! ウソでしょ!!)

彼女は、実の父親と知っていてこの人を失脚させようとしてるわけ???)

若い調査員は一瞬、華織の動揺したような顔を見て、こう言った。

「あのう。大丈夫ですか? 続けさせてもらっていいですか?」

「えっ? あつ。はつ。はい。お願いします。」

『 生い立ち及び経歴：

出世後、 乳児院にて満一歳まで生育。

一九七六年八月八日に××児童養護施設(旧××孤児院)に転院。施設内に付属の養護学校にて九年間の義務教育を受ける。

一九九一年二月：特別養子縁組適用。実母 大内香奈の了承により佐藤家へ養子入り。大内恵子より佐藤恵子へ改名。

同年三月：××児童養護施設付属養護学校卒業。

一九九四年三月：私立青葉高等学校卒業。

一九九六年三月：私立青葉大学女子短期大学部卒業。

一九九九年：公認会計士試験(短答・論文式)合格。

二〇〇〇年：S T A 公認会計士事務所入社。

二〇〇四年：公認会計士認定。

二〇〇五年：世田谷区下北沢へ転居。現在に至る。 』

(高校から、同級だ。私と彼女はお互い顔も知らなかったけど同じ学年にいたんだ。

これも何かの運命かも知れない。

家も近いし、マジで彼女に色々本音の話が訊けるかもしれない。(

公認会計士試験は、華織とほぼ同じくらいの時期に一回の受験で合格しており、華織と同様にかなり優秀である。

しかし、それからが二人の人生の大きな分かれ目となった。

彼女は大手の公認会計士事務所へ入社し、ひたすら資格取得を目指す。

そして、華織ができなかったこれを果たした。

一方の華織はというと、ことごとく採用面接で落ち、遊園地で縫いぐるみを着てアルバイト生活だ。

高校から同じような道を歩みながら、『記憶障害』というハンデが人生の決定的な分かれ目となってしまっている。

これは決して本人のせいではない。

本人の努力が足りない訳ではない。

なのにどうしてそこに『分かれ目』が当たり前のように存在しているのか。

華織は佐藤恵子と同年であったが、納得がいかない、というより、佐藤恵子と会ってみて、ともかくいろんな話してみたい、という気持ちに強烈にかられた。

若い調査員は、一度報告書から目を離し、

「どうぞ、コーヒーを召し上がり下さい。

あと、重要な補足事項があります。」と言った。

『事情聴取及び独自調査により得た補足情報：

(1) ××児童養護施設在籍時代、当時を知る、相原高次施設主任(当時職名、現在、自営業経営、東京都杉並区)他二名の証言により、当人及び他二名計三名の女子児童に対し、施設内では二名の男性児童指導員及び一名の女性保育士による、児童虐待に該当する行

為が日常的に行われていたことが、判明した。  
これが行われていたと考えられる時期は、一九八八年より一九九一年頃迄の三年間。

当時当人は養護学校の七年生から九年生であり、一般の学生の中学一年から三年に該当する時期である。

なお、当人は一九八九年に一回、一九九〇年に二回の計三回、他一名は一九九一年に一回、児童虐待行為が原因とみられる墮胎を、同施設の医療業務委託先の産院で施されている。

これは、当時当院に勤務していた看護士二名（現在、東京都杉並区、さいたま市在住）の個別証言の一致により、保証の得られた内容である。

その後、施設は一九九一年三月に厚生省（現、厚生労働省）より排除勧告を受け、虐待に直接関与していた者三名を懲戒免職しているとの複数証言及び免職の記録（施設記録）を取得確保したが、当項（１）に該当する事実は、これらの私的証跡のみであり、当該勧告自体、当時の官報には記されていないため、公式の事実認定記録は存在しない。

官報の訂正表記も確認されていないため、これ以上の事実確認は可能でない。

ただし、調査後の心証としては、複数証言の一致点から、十分な保証が得られたと考える。』

華織は眉をしかめた。

（ええ？ひどい話。佐藤恵子さん。ごめん。あなたのそんな話まで聞きたくなかった。勝手に調べたのよ、探偵社が。ごめんなさい。）

『（２）実母 大内香奈は、当人出産直後、錦織時蔵に子の認知を迫るが、当時認められなかった模様。

一九七五年九月三日、午後五時十五分頃、JR山手線渋谷駅ホームの階段上から、大内香奈は階下へ転落、腰骨及び大腿骨を複雑骨折し、S記念病院へ救急搬送、手術以降、下半身不随となっている。

当時の警察関係者及び目撃者（二名、現在神奈川県及び兵庫県在住）の証言によると、男（錦織時蔵）は故意に女（大内香奈）を階下に落としたとみられ、当時、殺害未遂容疑で構内常駐保安員（警視庁派遣）による現行犯逮捕となったが、その後、男は不起訴処分となっている。

大内香奈は一昨年死亡。

死亡原因は、病死に依らない。特別養護老人ホームにて車椅子ごと六階のバルコニーより転落死。

当時の資料では、事故死として扱われている。

しかしその後、検察委員会にて当事件に関し、新たに錦織時蔵氏を起訴対象とする、起訴再検討請求があったとの記録までは確認できなかったが、その後起訴の事実はない。ただし、当調査結果は調査事実を述べるものであって、ただちに重要な判断を提供したりこれを促すものではない。』

華織は、ひどく悲しい心境になってきた。

（何かひどい話だ。本当なら、錦織副頭取は横領どころか、人を二度殺している、と言ってもいいくらいだ。彼女の今回の件も、何となく、いえ、完全に復讐のにおいがしてきた。）

若い調査員は、そこまで読んで、ちらっと白髪の男の方を見た。

白髪の男は、何も言わずに、しかし、しっかりと調査員に頷いてみせた。

「あと、最後になりますが、その他の報告事項として、とても重要と思われる内容がございます。」



それが誰に対する、何に対するものかすら、華織はわからなかった。

白髪の男は、ゆっくりと口を開いた。

「あなた。ご自身の住民票か戸籍謄本を取ったことがありますか？  
華織は震えながら答えた。

「……あ。ありません。両親の家と同じ世田谷区内なので、転居  
手続きもしてません。」

私の住民票所在地は自宅のままになっています。」

「言いくいのですが、違います。あなたはご両親のお住まいから  
転居されて、下北沢、つまり『もう一人のあなた』の住んでいると  
ころへ現に転居しています。」

「……………」

「つらかったのでしょうか。あなたの養護施設時代は……。

あなたは、それが自分に対して行われたのではないことにしなけれ  
ば生きていけなかったのですよ。」

ご自分の記憶も消して、その記憶を他人である『もう一人のあなた』  
へ移すしかなかった。

本当に心傷ましいことです。」

「馬鹿なことを言うのはやめて。ねえ。やめて！」

「私は若白髪で年寄りくさく見えますが、実は会計士事務所の大木  
君とは、幼馴染なんですよ。」

「もう、これ以上何も言わないで。お願いだから……………」

「大木君は君のことをとても心配して昨日もここへ来たんですよ。彼はS T A公認会計士事務所を訪問したとき、あなたを見たそうですよ。『もう一人のあなた』を。何かモノに取り憑かれたような、近寄りがたい雰囲気だったそうです。」

華織は、俯いたまま口を動かした。

「私にどうしろと言うの？・・・あなたは。」

「いいや。どうもしなくていいですよ。」

あなたは。ただ心の中で『もう一人のあなた』に優しい声を掛けてあげるだけでいいんです。」

「・・・・・・・・。」

「そうすれば、『もう一人のあなた』は、あなたに自分の記憶を戻してくれる筈です。」

そのときにあなたは決まらなくてはいいけません。

怖いことでしょう。忘れたい、決して思い出したくない記憶が戻ってくることは。

よく覚悟を決めておかないと。そこが肝心なのです。

これができるかと『もう一人のあなた』はあなたの生きている間中、一生、生き続けてしまいます。」

「・・・・・・・・。」

「あなたに記憶が戻れば、『もう一人のあなた』は自分が必要のない人間であることに気が付きます。」

そうすると自然と『もう一人のあなた』は消えていくのです。」

華織がふと気が付くと、面会室のドアのところには大木が立っていた。

「華織。これは焦ってはだめだ。ぼくは、言い忘れていたが、もう一つ資格を持っている。」

セラピスト。心理カウンセラーだ。こんな形で役に立つとは思ってもみなかったよ。」

「大木さん。私……。」

華織は、今、自分が何を口にしようとしたのかわからなくなった。

大木は話を続けた。

「錦織副頭取は、もうじき行われる定時株主総会で、取締役を退任することになったらしい。」

佐藤恵子はこれを知って何を感じるのだろうかね。

彼女の不幸は、そもそも錦織が彼女やその母親を見捨てたことから始まったんだ。

彼女の役割、つまり、復讐劇はこれで終わったのだろうか。それとも……。」

大木は、そのあと首を横に振った。

若い調査員は俯いたまま、もう話に耐えられない、というような顔をして、小さくなっている。

部屋の空気が『ピタリ』と止まった。

<十>

華織の目は、完全に行く場所を失って泳いでいる。いつもの華織の表情は、もうそこにはないようにも見えた。

調査報告書を大切そうに手にし、これを抱えた。  
しっかりと胸に。

華織は、一人俯き加減に部屋を出た。  
うつろな目。

これから華織の住むマンションへ。  
いや、恵子の住む下北沢へ？

事務所を出た彼女は、そのあと果たしてどちらの住居へ向かうのか。  
それとも別などどこかへ向かうのか。

それは、彼女自身もわからない……。..  
まして、他の誰にとっても、まったく想像し得ないことであった。

( 『心に刻まれた記憶』 平成22年5月 )

(後書き)

多重人格に悩む人はまだまだ世の中に沢山います。私のように本  
人が悩むこともあります。これはごく軽症です。主人格が完全に  
交代人格をコントロール出来ています。重症の方は本当に大変です。  
ご家族のかたが苦労しています。この小説は実は交代人格の私  
が書きました。突然投稿して、書いた覚えの全くない主人格の私  
の驚く姿が今でも楽しみでワクワクしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1139/>

---

心に刻まれた記憶

2010年12月18日14時16分発行